

想起・物語・和解—歴史に向き合う態度と技術をめぐる議論の現在地

水島久光（東海大学）

発表要旨：

本報告では、第二次大戦終結から 80 年が経過したという“歴史的”な節目において、「意味の学問」たる記号研究の立場からいかなる発言が可能であるかを考える。

われわれが記号現象を読み解くことと歴史を語る行為との間には、目を逸らし合うような余所余所しさがある。理由のひとつは、記号学／論の「時間」への淡泊さだ。パースがアブダクションとリトロダクションに、大枠同一の働きを見ていたように、時の継起は、推論の水準では連続／離散あるいは構造の物理性に置き換えられてきた。もちろんパースは、習慣や法則、記憶への問いにおいて「現在」と「過去」の結びつきに関心を傾けてはいたが、主題化はしていない（ムラデノフ,2012）。歴史家もある意味見切っている——「彼ら（記号学者）は歴史の本を開いても、言葉の配置や、叙述（ナラシオン）や言説（ディスクール）しか目に入らない」（ジャブロンカ,2018）。

フッサール以降の現代哲学は、「時間」軸の外在性への懐疑により、歴史「学」の枠組みを激しく揺さぶってきた。そして「ニュー・ヒストリー」の機運は数多の実験を後押しし、「過去」の断片を再構成する「方法の乱立」を呼び込む。一方「記憶技術」は前世紀後半、メディアのデジタル化と計算（機）至上主義に絡めとられ、歴史は「現在主義（Présentisme）」イデオロギーの軍門に下った。「歴史（学）の危機」は、統合ポータルのメタデータ支配によって、いよいよ“土俵際”の様相にある——このタイミングでの“メモリアル・イヤー”の到来は何を意味するのか——「新しい戦前」「風化」「有事に備えよ」等の煽り文句の拡散は、最早目に余るレベルだ。

本報告では、記号研究の立場から歴史（学）に再接近を図ることで、この閉塞を破る三つの可能性を示す。一つは記憶の端緒＝「想起」の条件の問題で、アライダ・アスマンの方法を検討する。二つ目は歴史化、すなわち叙述の「人称性」に関わる問題で、イヴァン・ジャブロンカの方法を検討する。最後に、我々は「歴史」叙述にどう抗い、そこから何を得るか——「証言・告白」から「赦し」に至るプロセスを検証する。ここで参照されるのは、ジャック・デリダの生前最後の講演とそこに結実するいくつかのテキストである。興味深いことに、この三名はいずれもアーカイブについて積極的に言及をしてきた。そしてそれらの問いを行為者が辿るロープは、しっかりと、等しくホロコーストに係留されている。

報告者はかつて（2008-9 年）、BPO 放送倫理・番組向上機構（放送倫理検証委員会）の委員として、政治介入で番組内容が改変された『ETV2001：シリーズ戦争をどう裁くか』の検証に携わった（https://www.bpo.gr.jp/?p=2810&meta_key=2009）。その作業を具体的事例として示し、この問題に関する当事者性を担保したいと考えている。

【参考文献】

- イヴァン・ムラデノフ『パースから読むメタファーと記憶』有馬道子訳、勁草書房、2012
アライダ・アスマン『想起の空間—文化的記憶の形態と変遷』安川晴基訳、水声社、2007 他
イヴァン・ジャブロンカ『歴史は現代文学である—社会科学のためのマニフェスト』真野倫平訳、名古屋大学出版会、2018 他
ジャック・デリダ「赦し、真理、和解—そのジャンルは何か？」増田一夫訳（『別冊「環」ジャック・デリダ 1930-2004』藤原書店、2007 他